

ユン ドン ジュ

同志社大学の尹東柱詩碑 建立過程の余談

ソ ジョン ミン
徐 正敏

(明治学院大学教養教育センター客員教授)

尹東柱は韓国で一番有名な詩人である。

特に韓国人であれば誰でも若い時には尹東柱の詩を覚え、彼の生涯を顧みた経験を持つていであろう。尹東柱は韓国の詩人であり、恋人であり、また韓国の若者の偶像でもある。もちろん彼が残した詩は美しく、詩の一つ一つが心に響く感動的な文学であるが、韓国人の、特に若者が尹東柱を敬愛する理由は彼の生涯のためでもある。彼のあまりにも短い生涯は儚くも美しく、「悲哀美」で満たされている。彼は朝鮮半島北東にある豆満江トマンリョウの向こう、満洲の明東で生まれたクリスチャンで、植民地時代にソウル延喜専門学校（現延世大学）を終えて日本に留学した。日本では東京の立教大学を経て、同志社大学で学んでいたのだが、そうした中、ハンゲルで詩を習作していたことが独立運動につながるといふ理由で警察に逮捕されることとなる。そして、逮捕からおよそ一年半後の1945年2月、福岡刑務所で獄死した。彼が死んでからわずか半年で彼の祖国は独立し、彼自身もその後有名な詩人となるのだが、もちろん彼はそのような事実を知らないまま

生涯を終えたのである。

その時代の若者がすべてそうだったように、私も学生時代、尹東柱と尹東柱の詩が好きだった。幼い頃から身体に障がいを持つていた私は、尹東柱の詩を読んで彼の生涯を思う度に、ある希望のようなものを感じていた。私が思うに彼は、彼が生きた時代において「歴史的障害」を持つており、「個人的で実存的な障害」を持つていた自分と「同一化」したりした。彼の詩にはいくら暗くても、いくら苦しい生活の中でも、また未来を夢見る「希望」が刻まれていることを感じた。そして残されている彼の何枚かの写真は、そのような凄絶な苦難の時代の悲しみの中でも、いつも明るい笑顔だけがあつた。特に、彼の「希望」は究極的なことらしく、信仰的な昇華にまで繋がっている。彼の詩は私の信仰的な省察の見本になったのだ。彼はその「希望」を「教会堂十字架」の上にかけておいたと自らの詩で明らかにしていた。

彼は、彼の一番有名な詩「序詩」の詩



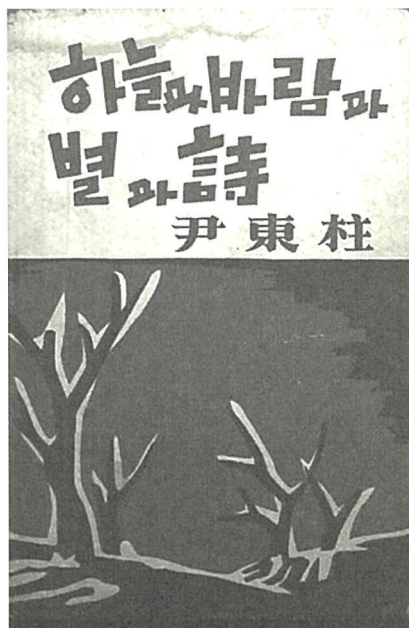
同志社時代の尹東柱。京都宇治川で同志社の友人たちと。下左2番目が尹東柱。やはり笑顔。

語のように、「天を仰ぎ一点の恥もないことを」願って生きた。そして、彼の詩と彼の生涯は韓国人に永遠の「夢」と「希望」をプレゼントしたのだ。

私は、他の理由もちろんあったが、彼の後輩になりたいという熱望で彼の母校でもあった延世大学に進学した。その大学の校庭の真ん中には尹東柱の詩碑が建てられている。私はそこで勉強し、そこで悩み、またそこで愛も学んだ。学生時代は勿論、1999年から2011年まで10年以上の延世大学の教授時代にも尹東柱の詩碑の辺りをぶらつくことに変わりはない。

しかし、尹東柱と私との特別な経験は他にある。同志社大学との縁である。

今から20年程前の1990年、私は同志社大学に研修員として2年間の留学をした。私の専攻のために必ず同志社大学で勉強しなければならないという理由もあったが、真の理由はまた他にあった。つまり尹東柱の最後の跡、その香りを感じたいという熱望であった。しかし、その頃、同志社には尹東柱を回想することができない物が一つもなかった。彼が生涯最後の学生時代を過ごした同志社に、彼を標すものが何一つないことは悔しいことであり、韓国人の尹東柱に対する愛と敬意の情緒で考えても切ないことであった。それは1990年5月のことだった。私は指導教授であった土肥昭夫教授を訪ねた。「先生、私が夏休みに韓国に帰って尹東柱を記念する板を一つ作って来ます。」韓国の詩人尹東柱が勉強したところ」と書いて、同志社大学の校庭のどこかの花壇にでもさしておいてはいけなんでしょうか。」そのようなことは私の指導教授が承諾する事項ではなかった。手



最初に出版された尹東柱の詩集
「空と風と星と詩」(1946)。

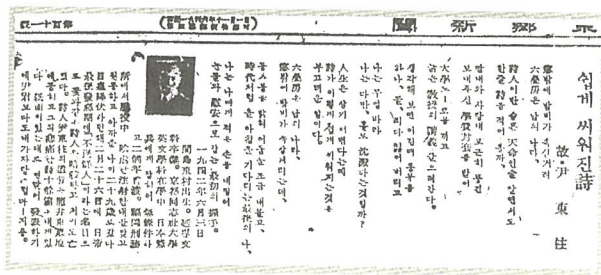
続きと過程が必要だということを感じた私は周りの韓国人留学生たちと話し合いを始めた。そして、たまに集まって「尹東柱勉強会」のようなことをしてみようとして意気投合した私たちは、定期的に尹東柱について話し合う非公式の集まりを始めた。場所も同志社大学の内外を選び分けず、彼の詩を読んで、彼の生涯について話した。思い出す初期のメンバーは、私以外に朴世用(当時大学院社会事業学博士課程)、鄭炳淳(当時大学院国文学博士課程)、尹政旭(当時大学院社会事業学博士課程)、李賢珠(当時

社会事業学博士課程)などもメンバーではなかったが時々、集まりに参加した。この集まりは、とても楽しい集まりであった。何か大きな目標や課題があったわけでもなく、無理やりに拘束されていたわけではない。時には集まりの後にある2次会に関心があつて参加する先輩、後輩たちがもつと多かつたこともあつたが、倦まず弛まず同志社と尹東柱の間の深い関連を認識していったのである。そしてその時の私は、個人的に韓国の初期クリスチャンの民族主義について研究しており、彼らの信仰と植民地だった祖国を救

大学院新聞放送学
修士課程特別学
生)、盧永錫(当時
時経済学学部学
生)、車庚宰(当時
時社会事業学学部
学生)、そして私
と同じく韓国の延
世大学出身で先輩
の趙裁国(当時神
学博士課程)、後
輩の姜恵廷(当時

おうとする民族的な熱望を主題として論文を書いていた。その中に登場する一人として尹東柱を選んだ。つまり、キリスト教史の研究対象として尹東柱を選んだのである。それまで尹東柱は文学史の中で検討の対象ではあつたが、宗教史の中では研究の対象ではなかつた。やつと尹東柱を含めた9人の生涯の研究が終わり、1990年、韓国で先に一冊の単行本として出版したのである。

一方、私はその頃、同志社の外の研究グループにも熱心に参加していた。同志社大学の神学部出身で実業家と同時に歴史研究者でもあつた韓哲曦先生の青丘文庫グループである。当時、神戸の須磨にあり、多くの歴史と宗教関連の資料を集めて整理していた青丘文庫にはいくつもの研究会が作られ、運営されていた。その中で活発な活動をしていた「日韓キリスト教史研究会」は、韓哲曦先生と、当時日韓関係を専門で研究していた桃山学院大学教授だった蔵田雅彦先生が中心となつていた研究会であつた。ここには飛田雄一、李省展、後藤聡先生などが主要



해방 뒤 최초로, 경향신문 1947년 2월 13일자 1면에 소개된 윤동주의 시와, 시인 장지용이 쓴 윤동주의 생애. 그의 시와 생애는 이런 식으로 세상에 널리 알려지기 시작했다.

戦後初めて韓国新聞で紹介された尹東柱の詩と略歴。略歴を書いたのは、同志社の先輩詩人である鄭芝溶。同志社尹東柱詩碑と並んで彼の詩碑も建てられてある。

なメンバーだった。これらの研究会では先ほど話した私の最初の本、つまり韓国キリスト教人物研究の単行本を日本語に翻訳して出版することに熱心だった。私としては不足な著書を日本語版まで出版することが恥ずかしかったが、先輩・仲間の友情を深く感じるきっかけでもあった。特に当時、韓哲曦先生は私の留学生

活を後援してくださり、どのような問題でも相談していた「代父」のような存在であった。私は同志社大学のどこかに「尹東柱がいた痕跡」を標しや記念物で残すことができないのかと韓哲曦先生に初めて相談した。先生はずいぶん長い間、深くご自身の学生時代を回想して「1940年代半ばは、その大変な時代、私は神学部で彼は英文学部に通ったから一度も彼と私は会ったことがない。しかし、今出川校地のどこかで尹東柱と私は指先が振れ合った縁（絆）が確かにあったはずの同級生なのだ。同志社に彼の記念を残すことが出来るまで助けましょう。」その後、日韓キリスト教史研究会メンバーたちの協力もあり私の本は翻訳が完了し『民族を愛した韓国のキリスト者たち』（東京…日本基督教団出版局、1991）というタイトルで刊行された。その中に尹東柱の生涯と信仰が一つの主題で挙げられたことは言うまでもない。小さな結果に少し喜びを一緒に分かち合った韓哲曦先生と研究会のメンバーたちはその年の冬、日本語版出版を記念する出版記念会を開いてくれた。場所は京都の新都ホ

テルであった。出版記念会でもあったが、留学生生活を終え韓国へ帰国する私への送別の意味もこめられていた。この席で韓哲曦先生は同志社出身の在日朝鮮韓国人、韓国人留学生、韓国に関心のある日本の研究者と、韓国に深い理解を持った日本人学生らと共に尹東柱記念事業を推進し、その事業を物心両面で支援すると宣言した。

その後、私は1992年春に韓国に帰った。身は帰ったが、心はそこにあった。韓哲曦先生や先輩・後輩たちからついに「同志社コリアクラブ」が組織されて活発な活動が展開されているという知らせを聞いたからだ。そして、尹東柱逝去50周年にあたる1995年に同志社校庭に彼の詩碑を建てるのが最初の事業として決まったという話を聞いたときには、素朴な私の願望が実現していくことに喜びがあふれた。「尹東柱の集まり」を非公式的に作り、よく集まり徹夜で討論した朴世用君が、特にこの「同志社コリアクラブ」の実務的な幹事の仕事を引き受けていてくれたことにどれだけ感謝して

いいものか分からない。

朴君はこのことで韓国を飛び回っていた。まだ生存している尹東柱詩人の遺族たちへの連絡や協力の依頼だけでなく、尹東柱詩碑を建て、彼を記念する様々な事業を展開し、また一部資料を所蔵している延世大学と協力するための仕事のほとんどを担当していたからだ。そして、ソウルへ来るたびに私を訪ね、詩碑建立のきっかけになった思い出話をしながら、これからの具体的な過程を相談していた。「同志社コリアクラブ」の活発な活動、同志社大学の積極的な協力、韓国側の協力などすべてが感謝するべき事であったが、一番感激的なことは他にあった。以前、延世大学の詩碑を建立する際に、建築学を専攻した尹東柱のいところによって二つの詩碑デザインが提案され、その一つが延世大学の詩碑に選択されたのだが、もう一方のデザイン案についても、その時の設計図がそのまま保存されていたということだった。つまり延世大学にあるタテ型の詩碑とは違う、ヨコ型の詩碑の設計図が残っており、それを同志社大学



韓国延世大学にある尹東柱の詩碑。
同志社の詩碑と同じ設計者の作品。

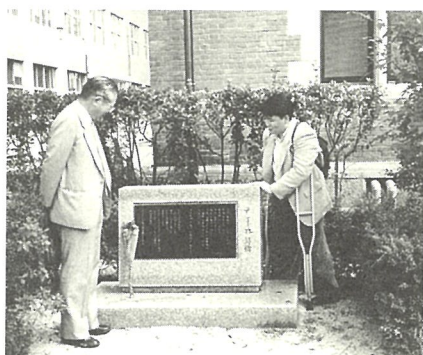
に建てる詩碑設計図として設計者から提供してもらえたのだ。この設計図を有り難く受け取った私と朴世用君はどんなに嬉しかったことか分からない。留学していた時に付き合ひのあった留学生何人かと日本の友達何人かと共に尹東柱について、その夜が過ぎることも分からないほど、語り合ったものである。

すべてが順調に進むように見えており、私は詩碑の完成、除幕式の話だけを待っていた。ところが、幹事の朴世用君から胸が痛む連絡が届いた。「先輩、同志社大学の尹東柱詩碑建立はどうしても難し

いようです。詩碑の題目になる名札を『韓国の詩人尹東柱の詩碑』にするのか、『朝鮮の詩人尹東柱の詩碑』にするのか、『同志社コリアクラブ』に所属する『民団(韓国国籍)』と『総連(朝鮮国籍)』のメンバー間に、譲れない葛藤が続いています」私としては悲嘆の話に違いなかった。

失った祖国を想い、悲しい目で空を眺めた尹東柱の胸がそのまま伝わってきた。まだ尹東柱の祖国は完全に解放された祖国ではなく、結局、私たちは分断された祖国のことで涙を流さざるを得ない立場だったのだ。

私は朴世用君と相談をした。「まずは詩碑の名札を抜くとか、国籍を書かずに『詩人尹東柱』の詩碑とする方法がある」しかし、私たちはそれも胸が痛む事だという結論に至った。祖国がない悲しみ、国籍を奪われたまま死んだ尹東柱に、まだ祖国の名前を付けてあげることができないことも申し訳ないことだった。それでこのような提案をすることにした。「統一のその日まで」を前提で「コリアの詩



1995年10月、初めて同志社の尹東柱の詩碑を訪ねた筆者と土肥昭夫教授(左)。

人尹東柱」にしよう、という提案だった。これは暗黙的な条件ではあるが、韓国と朝鮮が統一をする日確かに、同志社校庭の尹東柱詩碑の名札を統一した祖国の名前に変えて、新たに刻んで入れなければならぬという前提である。それで今も同志社大学の詩碑は「コリアの詩人尹東柱詩碑」なのだ。それ以前に詩碑の計画を進めた団体の名前が「コリアクラブ」であったことも関係あっただろう。

なんとか最大の危機を乗り越え、同志社の尹東柱詩碑は彼の死後50周年の19

95年2月15日に除幕された。参加した人々は、その日京都の天気は冷たくて風は荒々しく吹いたと言った。残念ながら、その席に参加して詩碑を撫でたかったが、私はやむを得ない事情で参加ができなかった。そして何ヶ月か後、私は尹東柱詩碑を撫でるために日本に来了。最初に私が「記念する板を作り校庭の花壇に建てるのはどうか」と相談した指導教授である土肥昭夫教授は、喜びいっぱいの気持ちで私を詩碑に案内してくれた。どれだけ長い時間、そこにいたのか分からない。先生と別れた後も私はまた詩碑のところに来了。そしてそこで昔の私の夢の実現を喜び、長い間撫でた。私は1995年のある日、夕暮れまでそこに留まった。

同志社大学の尹東柱詩碑は、確かに個人的な夢の実現であった。しかし、それは重要ではない。同志社は植民地の青年尹東柱の最後の青春を生きた場所だ。そして、彼は韓国の若者の永遠な希望と夢と愛になった。

つまり、同志社大学は校庭に、韓国人

の清い魂と夢と希望の象徴を抱いているのだ。それほど同志社大学の尹東柱詩碑は歴史的意義がある名所なのである。

「追いかけてきた陽の光がいま 教会堂のてつぺん十字架にかかりました。

尖塔があんなに高いのに どのように上がつていけるのでしょうか。

鐘の音も聞こえてこなくて 口笛でも吹きながらさまよい歩いて、

苦しんだ男、

幸せなイエス・クリストの ように

十字架が許されるのなら

頭を垂れて

花のように吹き出す血を

黄昏れていく空のした 静かに流しましょう。」

ユンドジュ
尹東柱の詩 「十字架」